



海外交流

大阪大学外国語学部 ハンガリー語専攻紹介

早稲田 みか*

Osaka University, School of Foreign Studies, Hungarian Studies

Key Words : Hungary, Hungarian language, Hungarian studies

1. 日本におけるハンガリー語教育

ハンガリー語やハンガリーといっても、日本ではまだまだなじみが薄いかもしれない。英語やフランス語、ドイツ語などヨーロッパの主要な言語と比較すると、ハンガリー語はいわばマイナーな小言語であり、それがどのような言語であるかを知る人も少ないだろう。日本との関わりもさほど深くないことから、日本におけるハンガリー語教育やハンガリー研究の歴史は浅いといわざるをえない。

しかし、大阪大学外国語学部にはハンガリー語専攻があり、ハンガリー語を第1外国語として学ぶことができる。2013年現在、ハンガリー語は日本の複数の大学（関西外国語大学、城西大学、東海大学、東京外国語大学など）で教えられてはいるが、いずれも選択科目として開講されているにすぎず、専攻外国語として専門的に学ぶことができるのは、日本で唯一、大阪大学外国語学部だけである。この意味で、きわめて貴重な存在といえるだろう。

日本におけるハンガリー語教育のパイオニアは今岡十一郎氏（1888-1973）である。氏は、『ハンガリー語四週間』（大学書林、1942年）や『ハンガリー語辞典』（日洪文化協会、1973年）を著している。興味深いことは、今岡氏の『ハンガリー語四週間』が出る1年前に、大阪で、関西日洪協会文典委員会編集による『ハンガリー語初等文典』（関西日洪協会、

1941年）が出版されていることである。それによれば、関西日洪協会は昭和15年（1940年）に、日本における最初のハンガリー語講習会を秋冬二季にわたって大阪市で開講したとある。大阪はもともとハンガリー語教育と深い関わりをもつ地だったのである。

ハンガリー語専攻が開設されたのは、1993年4月のことである。当時の大阪外国語大学外国語学部に設置された。大阪外国語大学時代、ハンガリー語はすでに1985年から選択外国語科目として教えられていたが、1993年の学科改組のうちに、新たな専攻語として導入されたのである。ちなみに同年、東京外国語大学にポーランド語とチェコ語が専攻語として開設されている。

大阪外国語大学は、2007年10月に大阪大学に統合され、現在に至っている。ハンガリー語専攻は今年（2013年）の春に創立20周年を迎える。

ハンガリー語専攻の入学定員は15名、専任教員は日本人教員2名と、ハンガリー人教員1名である。この他、数名の非常勤講師がハンガリー関係の授業を担当している。

ハンガリー語専攻生は最初の2年間で集中的にハンガリー語を学ぶが、語学教育において重要なのは、なによりもまず学習者のモチベーションである。しかし、ハンガリー語専攻に入学してくる学生の多くは、最初からハンガリー語を学びたいという強い動機を持っているわけではなく、ハンガリーという国や文化、言語についての知識もほとんどゼロに近い。

ところがおもしろいことに、入学時には特別な動機をもっていない学生たちも、その多くがハンガリー語の授業や、さまざまな行事などをおして、しだいにハンガリーに関心を持つようになるのである。

そのひとつが、大阪外国語大学時代からの伝統行事である語劇である。秋の大学祭の行事のひとつで



* Mika WASEDA

1956年3月生

一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得退学

現在、大阪大学言語文化研究科教授 人文博士 ハンガリー語学

TEL : 072-730-5341

E-mail : waseda@lang.osaka-u.ac.jp

あり、学生たちが自分たちの専攻する言語で芝居を上演する。日本語字幕の作成のために台本を翻訳したり、内容をアレンジしたり、衣装や舞台装置を準備したり、すべて学生たちが行う。出演者たちはせりふを覚えなくてはならない。語劇をとおして、多くの学生がハンガリー語の可能性や楽しさを実感し、ハンガリー文学に興味をもつものもでてくる。

こうしてたくさんの学生が、やがて留学を希望するようになる。彼らは1・2年次の夏にハンガリーで開催されるサマースクールに参加したり、3年次の秋から10ヶ月間、ハンガリーに留学したりする。

留学した学生は中級以上のハンガリー語を習得して帰ってくるが、卒業後、なかなかそれを生かすことができないのが現状であり、われわれ教員の悩みでもある。ハンガリー語を勉強してほしいが、それが将来、すぐに仕事にむすびつくかということ、ことはそう簡単ではない。ハンガリー専攻の卒業生の大多数は、卒業後、残念ながら、ハンガリーとはまったく関係のない分野で職につくことが多い。とはいえ、少数ながらも、ハンガリーで日系の企業に就職したり、日本語教師として活躍したり、ハンガリーの児童文学の翻訳に携わったりしている卒業生もいる。今後、そうした学生がますます増えていくことを期待したい。

2. ハンガリー語について

ハンガリー語（自称はマジャル語）は、系統的にはウラル語族に属する言語で、主としてヨーロッパの中央部に位置するハンガリーで話されている。周辺国のルーマニア、スロヴァキア、ウクライナ、セルビア、オーストリア、スロヴェニア、クロアチアにも、これらの地域が第一次世界大戦までオーストリア・ハンガリー君主国に属していたことから、今でもハンガリー語を話す人がおり、全世界では約1300万人の話し手があるとされている。

同じウラル語族に属する言語には、北欧で話されているフィンランド語やエストニア語がある。ウラル諸語の中でも系統的にハンガリー語に一番近い言語は、ロシアのシベリア地方で話されているウゴル語派のハンティ語とマンシ語である。系統的に近いとはいえ、互いに理解することはできない。

周辺諸国の言語はすべて、ハンガリー語とは系統の異なるインド・ヨーロッパ語族に属しており、語

彙も文法構造も大きく異なっている。ハンガリー語はヨーロッパの中央部にあって、系統的に孤立した孤島のような存在である。なぜこのような状況になったのであろうか。

ハンガリー語の話者の祖先は、もともとウラル山脈の辺りに暮らしていたのが、5世紀頃に移動を開始し、黒海と地中海の北部を経由して、9世紀末に現在の地にたどりつき、そこに定住し、現在に至ったといわれている。

しかし、19世紀末にはハンガリー語の系統をめぐって、大論争がおきたことがあった。ハンガリー語は、トルコ語などのチュルク諸語と同系統だと主張する学者たちとの間で激しい議論が戦わされたのである。この背景には、ハンガリー語の語彙の中に少なくない数のチュルク系の語彙が含まれていること、母音調和という音現象があること、文中での文法関係を語に後続する接辞によって表すこと（膠着語の特徴）など、チュルク諸語との共通性があった。現在では、チュルク系の語彙はハンガリー語の話者がウラル山脈の辺りから中央アジアを経て現在のハンガリーの地に移動する過程で借用されたものだとされている。

このように、周辺の言語とは系統を異にすることから、ハンガリー語はヨーロッパの中にあって一風変わった言語、非常にむずかしい言語とみなされている。

他の言語にはあまり見られない現象のひとつに、動詞の活用がある。ハンガリー語では動詞が主語の単数・複数と人称だけでなく、目的語が定まっているか（定活用）、そうでないか（不定活用）によって、異なった変化をする。例えば、何でもいいのでペンを1本捜している場合は、keres-ek（捜す－1人称単数不定活用語尾）、特定のペンを捜している場合には、keres-em（捜す－1人称単数定活用語尾）のように、動詞の活用語尾を使い分けなくてはならない。

つまり、ハンガリー語では、動詞の活用語尾のなかに主語だけでなく目的語の情報も含まれていることになる。この現象はウラル諸語のなかでも珍しいもので、フィンランド語やエストニア語には見られない。定冠詞の用法とあいまって、日本語を母語とするわたしたちにとっては習得が難しいことのひとつである。

文字はラテン文字を使用し、原則として、書いてあるように読めばよいので、アルファベットと発音の対応を習得すれば、比較的簡単にテキストを読むことができる。

東方からヨーロッパに移動してきた民族のなかで、今日にいたるまで、本来の言語を保持しているのはハンガリー人だけである。それは初代国王のイシュトヴァーンがキリスト教を受容してヨーロッパ文明に同化しようとしたからだといわれている。そのとき同時に取り入れたのが、教会の文字、すなわちラテン文字である。

ラテン文字だけでは書き表せない音をどのように表記するか、さまざまな工夫がなされた。そのひとつがラテン文字に付け加える補助記号である。ハンガリー語では母音と子音に長短の区別があり、長母音には、短母音の上に短い斜線の長音記号をつける(á, é, í, ó, ú)。ドイツ語にみられるようなウムラウト記号を使って書き表す短母音(ö, ü)に対応する長母音には、二重の短い斜線をつける(ő, ű)。この二重斜線の記号はハンガリー語にしかないものなので、これが出てくれば、それはハンガリー語だとわかる。

最後にハンガリー語の文字の紹介をかねて、モシヨニ・アリーズ著『ハンガリーの昔話』(Mosonyi Alíz, *Magyarmesék*)から、小話をふたつ引用しよう。ひとつめは、ハンガリー人が得意とするブラックジョーク。ハンガリーの国旗は横縞の3色旗で、上から赤・白・緑である。ふたつめは、ハンガリー語は罵倒表現が非常に豊富なことを皮肉ったジョークである。

Volt egyszer egy cukrász bácsi, aki a magyar hazáját nagyon szerette, és ha valami szép magyar ünnep volt, olyankor nem akart egyszerű habos süteményeket meg csokoládétortákat sütni, hanem valami hazaszerető tortát. Ki is gondolta, meg is sütötte, háromszínű krém volt benne, piros, fehér, zöld, málna, vanília, cián, finom volt nagyon.

昔々あるところにケーキ屋のおじさんがひとりおりました。ハンガリーが大好きで、ハンガリーのお

祝い事があるときには、ありきたりの生クリームのかきやチョコレートケーキではなくて、なにか特別な愛国的なケーキをつくりたいとかねがね思っていました。あるときよい考えがひらめいたので、さっそく作ってみました。赤白緑の三色クリームのケーキです。ラズベリーにバニラに青酸カリ。それはおいしかったとき。

Volt egyszer egy királynő, úgy hívták, Erzsébet, angol volt persze. Ő mondta a legszebben a világon, hogy No! meg azt is, hogy Yes! és még a többi angol szavakat is. De egyszer csak nagyon megunta a sok angol beszédet, és megtanult magyarul. Ült a trónon, és azt mondogatta, Ebugatta! Lárifári! Teringette! És még azt is, hogy A kutya fáját! Az angolok ezt nem sokáig túrték, Velünk nem lehet így beszélni, mondták, és elkergették a királynőt a trónról. Akkor Erzsébet elment a magyarokhoz, és lett belőle jó magyar királynő.

昔々あるところに女王様がひとりおりました。名前はエリザベス。言わずと知れたイギリス人。世界一じょうずにノーと言いました。そしてイエスも。さらにはほかの英語の言葉もね。ところがあるとき、英語を話すのにあきてしまい、ハンガリー語をマスターしました。そうして、王座にすわって言いました。ちえ！ すっとこどっこい！ てやんでー！さらにはこんなことも。こんちくしょうめ！ イギリス人はたまりかねて、女王さまを王座から追いはらいました。エリザベスはハンガリー人たちのところへ行きました。そうして、そこでよい女王様になりましたとき。



ハンガリーの国旗